

---

# やさしく歌って

矢島さとる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やさしく歌って

### 【Nコード】

N9343T

### 【作者名】

矢島さとる

### 【あらすじ】

一流製薬会社に勤める愛美と、遣伝子工学を扱う会社員の浩は仕事で知り合い、互いの仕事を助言し合う仲になる。そんな中、浩はジャズ・バーで憧れの女性シンガー、紀子とひよんなきっかけで会うようになる。

愛美との仲は次第に恋人へと発展し、紀子との間も友達以上になってゆく充実して幸せな日々を送る浩だった。

しかし愛美が急病に倒れると、紀子とも連絡が途絶え事態は流転する。愛美を救うために、浩は必死に遣伝子を探す。

## 一章 はじまり

### 一章

「浮かない顔をしてどうしたの？」

俺の一歳年上で三十歳の井上愛美が、大きな眼を輝かせて俺の顔を覗き込むように訊いた。彼女は東都薬科大学を出て大手製薬メーカーである第三製薬の研究開発部門、尾張工場に勤務していた。

「わかつちやったか。まなみの洞察力つて鋭いね」俺は思わず苦笑した。俺、山崎浩は地元の国立尾張大学農学部を卒業してから、バイオテクノロジーの新興中小企業、中央バイオに勤めるサラリーマンだ。もう就職して五年たち、二十九歳になる。最近は遺伝子組み換え作物の開発に携わっていた。

俺たちは尾張市の繁華街にある和食屋で、遅い夕食を摂っていた。店内はボックス席が一つ一つ薄い板壁で区切られて小さな二人の間を作っていた。隣はサラリーマンが四人が賑やかに飲んでいるようで、反対側は男女二人が静かに飲んでいるようだった。

愛美とは一年前に、日本遺伝子細胞学会の遺伝子診断の技術を習得するワークショップで一緒に学んで知り合った。彼女は癌の原因となる遺伝子について研究する仕事に従事していた。

もし癌の原因遺伝子突き止めることができれば、癌を制圧する薬を作り出す有力な足がかりになる。多くの製薬メーカーや研究者が血眼になって無数の遺伝子から、癌を作り出す『犯人』になる遺伝子を探していた。

しかしヒトの遺伝子は星の数ほどあって、その中から原因になっている遺伝子突き止める作業は砂漠の中から一本の針を探し出すような途方もない大仕事だった。

一方の俺は、遺伝子を組み換えることで害虫のつかない作物を開発していた。この仕事を成功させれば、農薬の削減と同時に作物収穫量も増加させ得る画期的な事業になる。二人とも、人類の明るい未来と夢を創造するような仕事をしていて充実していたが、それだけに日々の生活は多忙だった。

「ハエって害虫が寄り付かないじゃない？」俺は目の前に座る愛美にそう言った。

「確かにハエに害虫がたかっている姿は想像すらできないわね」愛美は梅酒のロツクのグラスの氷を揺すってカラカラと音を立てた。腕時計の針は午後十時を指していた。

「内密の話だけど、ハエの遺伝子を大豆に組み込もうというプロジェクトが動き出しているんだ」俺は企業秘密の話に、思わず声を落として言った。

「へー、私なんかには思いもつかない面白い発想ね」愛美は感心したように頷くと、持っていたグラスから梅酒をチビりと飲んだ。

「確かに発想としては面白いよ。だけどハエの入った大豆ってさ…、何だか気持ち悪くない？」そう言う俺は目の前にある枝豆をつまみ上げて口に入れた。この豆にハエの遺伝子が組み込まれていると想像したら、少しおぞましい気がした。

「アハハ、何も大豆にハエがまるごと入ってるわけじゃないでしょ。全然問題ないじゃない。やだな、ひろしは…、本当に理系？」愛美は形の良い唇から白い歯を覗かせて可笑しそうに笑った。

「いや…、この前までやってた防虫ハーブの遺伝子を大豆に組み込む作業とは違ってさ、何だか神が造りたもうた物を、そんな形に造り変えるなんて…、神をも恐れぬ行為、神への冒とくのような気がするんだ」俺がそう言うと、愛美は笑うのをやめて俺に向き直った。

「じゃあ、医学はどうなの？ 本来は死ぬべき人を、神の定めに従

らって助けようとするじゃない。それも神への冒とくなの？」それほど酒に強くない愛美は目元を薄らと桃色に染めて言った。

「…いや、そうとは言えない」俺は少し考えてから答えた。なるほど、愛美の言う事はまったく間違っていない。癌の制圧という事業の一翼を担っている彼女の、至極もつともな意見だと思った。

「ひろしの仕事成功してさ、その大豆が途上国にも普及できるようにになったら地球上にいる多くの餓死者が救えると思う。素晴らしい仕事じゃない。自信を持って前に進むべきよ」愛美はそう言う俺の眼を見つめて頷いた。

「…そうだな。そうしてみるよ。そもそもこの仕事成功するかどうかもわからないのに、俺は何をウジウジ考えてるんだろうね」俺は苦笑して麦焼酎のお湯割りをグイと飲んだ。

「そう、その意気よ」愛美はそう言うときまた微笑んで、皿に残っていた手羽先を両手で口に運んだ。

食事が終わって外に出ると、三月になったと言うのに寒い風が吹いていた。どちらからともなく二人で手をつないで地下鉄駅に向かった。学会で知り合った後、俺たちは月に一回くらい食事を一緒にして話し合う仲になったが、最近は一週に一回は会っている。俺は愛美といると安らげて楽しかったし、きっと彼女もそう感じているのだと思う。二人の距離は少しずつ縮まっている気がした。

繁華街は、このところの景気の低迷で夜が早いようだ。ブラブラ飲み歩く人よりも、帰路につく人の方が多かった。

「結婚って考えた事ある？」俺の右を歩く愛美が前を見たままで言った。不意に吹いてきた春風で彼女の白いコートの裾がはためいた。「…そうだね。もうそろそろ考える年齢だね」俺は、初めて彼女から聞く結婚という単語に少々ドキツとしたが、声は平静を装ってそう答えた。考えてみると俺も今年の七月には三十歳になるなあと思った。

「まなみはどうなの？」去年の十月に三十歳になった彼女に俺は質問した。

「そうだね。私はとっくにそういう事を考えるお年頃…、いや、もう過ぎていくかも、アハ。同級生の大半は結婚しちゃったし、早いコは小学生の子供までいるわ」愛美は俺を見て微笑んだ。彼女の色白の顔に光る瞳が綺麗だった。彼女に今まで恋人がいなかったとは思えないが、過去の話は相手が喋るまで訊かないでおこう、それが大人の男だと俺は思った。

「どういう人と結婚したい？」俺は彼女の真意を測りつつ訊いた。

「そうね…。私を理解してくれて愛してくれる人。…ひろしは、どんな人と結婚したい？」愛美は悪戯っぽい目で笑った。

「そうだなあ。まなみと同じになっちゃうけど、俺を理解して愛してくれる人」

「やっぱり自分を理解してくれる人がいいよね」愛美は小さくうなずいた。俺は愛美を理解しているつもりだけど、愛美はどう考えているのだろうか？

そう思ったが言葉には出さなかった。歩きながらではなく、ちゃんと話し合っている時に訊こう、と思った。階段を下りて着いた地下鉄の駅は混んでいた。俺たちはホームで反対方向の電車に乗るため別れ別れになる。定期券を改札機に入れて通り抜けると、

「今度の週末は会える？」と俺は愛美に訊いた。

「うん、土曜も仕事だけど夜なら大丈夫よ」

「俺も仕事があるけど夕方に終わる。じゃあ…、俺の部屋に来ない？ 何か作るよ」俺は思い切って愛美を誘ってみた。

「わあ、それは楽しみね。何を作ってくれるの？」嬉しそうな顔をして愛美が俺に訊いた。その笑顔を見て、俺は勇気が要ったけど誘ってみてよかったと思った。

「そうだな…。カレーライスでもいいかな？」正直に言えば俺はほとんど自炊しないので料理には自信がない。ずっと昔に作った事の

あるメニューを口走った。

「カレーは大好きよ。楽しみにしてるね」ホームに風を切って愛美の乗る電車が入って来た。

「またメールしてね」愛美が肩まである髪をかきあげて言った。

「ああ、また連絡する。あ、失敗したらレトルトのカレーになってるかも」

「アハハ、かまわないわよ。おやすみ」愛美は笑顔で答えると地下鉄に乗り込み、こちらを向いて手を小さく振った。ホームに残った俺は、声を出さず口だけで『おやすみ』と言って手を振った。間もなく愛美を乗せた地下鉄は扉を閉じて、ゆっくりと走り去った。

列車が見えなくなるまで見送ると、反対側のホームに俺の乗る列車が到着した。人の波と共に列車に乗ると吊革につかまる。列車が走りだすと、すぐに車窓は暗闇に包まれた。

俺の頭に愛美の顔がフラッシュ・バックした。彼女の口から出た『結婚』という単語も頭によみがえった。

「結婚か…」俺は思わず小さくひとり言を言った。周りは地下鉄の轟音で俺のひとり言は誰にも聞こえない。愛美と一生を共にすることは想像もつかないが、悪くない気がした。

「前向きに考えてみるか」俺のひとり言はまた地下鉄の轟音でかき消えた。

翌日は取引先の中堅食品メーカーの幹部二人から、繁華街の中華料理屋で打ち合わせを兼ねた接待を受けた。俺の四年先輩の西沢課長と二人が招待され、三時間ほど仕事の話を交えて食事をした。俺たちはこの会社と稲の品種改良に取り組む共同研究をしていて、美味しい上に育てる手間を省ける品種はすでに完成段階で座も明るかった。

食事は無事に終わり、十時前に解散した。少し前までは食事後、必ずと言っていいほどクラブやスナックなどで飲んだそうだが、今は経費節減のために二次会は滅多にない。

店を出て西沢課長と別れた俺は、近くにある『スイング』というジャズ・バーへ寄ることにした。スイングは規模としては小さいが老舗のジャズ・バーで、大学の頃、先輩の影響を受けてジャズを聴き始めてからたまに来ていた。このカウンターでバーボンをおおって強い煙草をふかすのが大人の趣味だと先輩から教えられ、そう思っていた。通っているうちにジャズが好きになり、自宅でもCDを買って聴くようになった。今では俺の数少ない趣味の一つになっていた。

今夜は菱田紀子という俺のお気に入りの歌手が唄っていることをネットで見えて知っていたので、接待の二次会がなければ聴きに寄ろうと思っていた。

重い木の扉を開けると、学校の教室の三倍くらいのスペースの店内の席は七割くらい埋まっていた。菱田紀子はステージですでに唄い始めていた。聞き覚えのある唄だったが曲名はわからなかった。でも彼女の歌声は俺の耳に心地良く響いた。

薄暗い店内で一番後ろの二人掛けの席が空いていたので、俺はそこに静かに座ると間もなく黒服のボーイが寄って来た。

「マツカラン…、いや、ニツカ黒の水割り」俺は小声で注文した。昨日の愛美の言った結婚という言葉で、これから少しは節約して結婚資金でも貯めようかと思った。所帯じみたという言葉にはまだ現実感がないが、結婚して家庭を持つたら嫌でも実感するのだろうかと思っただ。

今夜の菱田紀子は黒くて長いドレスを着ていた。間もなく彼女は二曲目のバラードを唄い始めた。眼を閉じて聴いていると彼女の歌声は、『ニューヨークのため息』と言われたヘレン・メリルという歌手に似た雰囲気、時に甘く切なく時に力強い美しさを持っていて俺は気に入っていた。

一年前に初めて此処で彼女の歌声を聴いた俺は、帰宅してすぐに

ネットのCDショップで彼女のアルバムを探し回った。菱田紀子はこれまでに二枚のアルバムを出しているようだったが、いずれもマイナーなアルバムで在庫を持っていない店を見つけないに苦労した。パソコンの前で一時間ほど粘り、やっと一枚だけ見つけて購入した。数日後に宅配便で届いた彼女のアルバムは俺の期待通りで、どの曲も心に染みて何度も繰り返し聴いていた。

菱田紀子はこの尾張市郊外にある尾張芸術大学出身のせいか、スイングでは月に三日は唄っていた。テーブルに置いてある予定表によると、今夜は六曲を三十分ほど唄う予定のようだ。今はロバータ・フラックの大ヒット曲、『やさしく歌って』を彼女の独特のジャズ風な歌い方にアレンジして唄っていた。彼女は小編成のバンドを従えて流暢な英語で「キリング・ミー・ソフトリー」と歌い続け、それを俺はうつとり聴いていた。

『歌詞を直訳するとやさしく歌ってではなく、やさしく殺してだな』  
と思いつつ、聴こえる彼女の声は俺の魂を揺さぶる何かを持っていた。彼女の切れ長の目は俺の方に向けて、俺に唄ってくれているような気がした。

最後に彼女はステイビー・ワンダーのアズをジャズ風に唄った。  
「私はいつも貴方を愛してる… いつも、いつも…」  
彼女はリズムに乗って繰り返し繰り返し英語でそう唄った。俺は愛美を思い浮かべながら手拍子を打って唄を聴いた。菱田紀子は楽しそうに唄い終わると、客席からの拍手に包まれてステージを終えた。

菱田紀子が下りると、少し明るくなった店内を見渡すことができた。店内はいつの間にかほぼ満員になっていた。十分ほどの休憩で楽団のメンバーが入れ替わってトランペットの有名奏者、向井収が壇上に上がった。彼は十年ほど前まで日米を渡り歩いて活躍した、知る人ぞ知る名トランペッターだ。

再び店内が暗くなるとスポットライトを浴びた向井が十八番の『スターダスト』を吹き始めた。店内は大きな拍手と歓声に包まれた。朗々と吹くトランペットを、俺は幕間に追加注文した二杯めの水割り片手に聴いていた。

「ここ、いいかしら？」後ろから聞き覚えのある女の声が出た。振り向くと薄暗がりの中を、さっきまでステージで唄っていた菱田紀子が微笑んで立っていた。

「ど、どうぞ」黒いドレスの上から黒っぽい上着をはおりロングヘアを後ろに結んでいたが、その女性は間違いない菱田紀子だった。

「ありがとう」と微笑んで彼女はフワリと俺の前に座った。その様子は天女が舞い降りてきたようで、俺は夢でも見ているのかテーブルの下で自分の膝をつねってみた。が、間違いなく現実だった。

「最近よく聴きにきてくれますよね」ジンジャエールを注文した菱田紀子が再び俺に微笑んだ。

「はい、貴女のファンです」

「ありがとう」そう言うと彼女はグラスを片手にステージの向井を見つめた。間近で見る菱田紀子は格好いい大人の女性だった。

それから三十分ほど、俺は夢見心地で向井収のトランペットを菱田紀子と一緒に聴いた。彼の演奏は素晴らしく、終了後はしばらく拍手が鳴り止まなかったが、店内が明るくなると客のざわめきも静まった。

「こんな風に向井収を聴けるなんて夢のようです」俺は前に座る菱田紀子に言った。俺の頬は紅潮していたに違いない。

「フフ、私も久しぶりにゆったりとした気分で彼の演奏を聴けたわ」「あ、俺、山崎といいます」俺は取りあえず彼女に自分の名刺を渡した。

「ご丁寧にありがとうございます。……中央バイオって、何の会社なんですか？」菱田さんが俺の名刺を見ながら尋ねた。俺の勤める会社は、規模は小さいし知名度も低い新興企業だったので初対面の人からは大

抵そう訊かれる。

「遺伝子を扱うバイオ関係の会社です」俺は答えた。

「遺伝子？　じゃあDNA鑑定とかするんですか？」

「DNA鑑定はできますが……、ひょっとして菱田さんはミステリーのファンですか？」

「そうよ」菱田さんが照れくさそうに肩をすくめた。

「今は遺伝子組み換えを主にやっています」俺は言った。

「面白そうなお仕事ね」

「はい、面白いです」そう俺が答えると、菱田さんは微笑んで、

「今から少し食事に行くんだけど、山崎さんはお腹がすいていませんか？」と言った。彼女の思いがけない申し出に、俺は天にも昇るような気がした。

「も、もちろん、喜んでお供します」

「近くに小料理屋があるの。そこでいい？」

「はい」

俺たちは立ち上がってスイングを出た。少し冷たい風が吹いていたが、高揚した気分の俺にはむしろ気持ちよく脚はフワフワと宙を浮いているようだった。

繁華街の通りを五分ほど歩くと、「この三階よ」と菱田さんが小さな白いビルの前で立ち止まった。中に入ってすぐの小さなエレベーターに二人で乗ると、菱田さんは百七十二センチの俺と肩を並べる身長があることに気づいた。

「菱田さんって背が高いんですね」

「ごめんね、大きい女で」彼女が俺の目の前で微笑んだ。彼女の年齢は公式発表によると俺の一歳上、つまり愛美と同じ年のはずだ。

三階に着くと彼女は先に立って、『小雪』と看板を出している店に入った。

「いらっしやませ」店内は十人ほど座れるカウンターがあり、中では中年の小奇麗な女性が二人で働いていた。向かって左側の席には

四人連れのサラリーマン風の男たちが食事をしながら飲んでいた。

「のりちゃん、久しぶり」カウンターの中で、白いセーターに白いエプロンをした女性が俺たちに右端の席を勧めて、おしぼりを出して微笑んだ。

「少しお腹がすいたの。そのボードに書いてある四品コースをお願い。山崎さんは？」おしぼりで手を拭きながら菱田さんは右に腰掛けた俺に訊いた。

「俺もそれをお願いします」中華のフルコースを食べてきたが、カウンターの前に下がっているホワイト・ボードに前菜、刺身、煮物、焼き物と書いてある四品くらいなら食べられそうだった。

「飲み物は？」菱田さんが目の前にある飲み物の入った背の高い透明な冷蔵庫を見ながら訊いた。

「取りあえずビールを」と俺が答えると、彼女も笑って「取りあえずビールってオジ様方の決まり文句みたいだけど、私も」と店員に言った。

エビスの小ビンとグラスが二つ、俺たちの前に置かれた。俺がビールを二つのグラスに注いで乾杯した。

「君の瞳に乾杯」俺が菱田さんの目を見て乾杯すると、  
「キザなセリフね」と彼女は笑って一口ビールを飲んだ。俺は半分ほどビールを飲んだら、菱田さんがお酌をしてくれた。間近から改めて見る彼女はスリムな身体つきだが、出るところは出てセクシーで良いスタイルだった。美人歌手と一緒に飲めるなんて俺はとても幸せな気分だった。

「カサブランカっていう映画を知ってます？」俺は菱田さんに訊いた。

「名前だけは知っています」彼女は小首をかしげて答えた。

「古い白黒映画なんだけど、それはそれは傑作だと思います」

「へー」

「ハンフリー・ボガードというイケメンが主演でキザなセリフを連発するんだけど、いちいち決まっついてちつとも嫌味じゃないんで

す」

「君の瞳に乾杯！も彼のセリフなの？」

「そのとおりです。でもね……、彼は本当に好きな女性のためだったら自分を捧げられるんです。男の中の男！って感じで、俺はとも懂れているんです」

「好きな女性のために自分を捧げる……。素敵だなあ。山崎さんってロマンティストねえ」菱田さんは頬杖をついて遠くを見た。切れ長の彼女の黒い瞳が物憂げに潤んでいて、何とも艶やかだった。

前菜と刺身の上品な盛り合わせは美味しかった。カウンターの中の『ママ』と呼ばれている白いエプロンの女性が菱田さんの前に立つてお酌をした。

「のりちゃん、最近はどう？」ママが言うと菱田さんは、まあまあねと短く答えてビールを勢い良く飲み干した。

「ビールの次はこれね。何か悩んでる？」ママが麦焼酎と氷を満たした新しいグラスを出してきて微笑んだ。

「別に……菱田さんは少しうつつむき加減にグラスを受け取った。

「あなたが此処に来るときは何かにつまづいた時が多いから。まあ、美味しいものでも食べて元気を出してね」ママが笑顔で菱田さんのグラスに焼酎を満たした。

「ありがと」菱田さんはそれを一口飲んで力なく笑った。俺もママから同じ焼酎を水割りにしてもらうと、先客たちが帰る様子でママは彼らを見送りに席を外した。

「何かあるんですか？」俺は菱田さんに訊いてみた。

「うん、こういう商売は浮き草稼業なので、いろいろあるのよ。……ねえ、私ってどういう女に見える？」

「大人の魅力的な女性に見えます」

「でも実は勝手な女なの」菱田さんは向き直って俺の目を見て言った。

「……人間は勝手な部分を誰でも持っています。でもそれは悪い事ばかりじゃない」

「そうかしら？」

「そうです。例えば俺のやっている仕事なんて、自然界の法則に逆らって人類の勝手な都合だけで遣伝子を組み替えているんです。でもそれで幸せになれる人が大勢いると信じるからこそ、俺は仕事にやりがいを感じているんです」

「なるほど……」

「それに人間って、たまには勝手に振舞わないと息が詰まってしまうよ。社会で生きる以上、人に合わせることは必要だけど合わせてばかりでは自分が自分でなくなっちゃう気がしませんか」

「言われてみればそのとおりね。…あなたって優しいのね」菱田さんは表情を崩すと、再び前を見て焼酎を飲んだ。

店を出たら十二時だった。

「今日はありがとう。また会えるかしら」菱田さんが夜の街を歩きながら言った。

「もちろん、喜んで」俺がそう言うと、菱田さんはバッグから携帯を出して「アドレス交換しましょう」と微笑んだ。

俺は彼女の携帯に赤外線通信で自分の携帯番号とメール・アドレスを送った。菱田さんは自分の携帯の画面で俺のアドレスを確認すると「私のアドレスは後で送るわ」と微笑んだ。一陣の春の夜風が舞った。

「私はここから歩いて帰るわ。山崎さんは？」

「俺は地下鉄で帰ります」

「じゃあ急がないと。もう終電の時刻よ」

「はい、じゃあここで」

「今夜はありがとう」

「いえ、こちらこそ。とても楽しかったです」

「私もよ。またね」

「はい、じゃあまた」俺は踵を返して地下鉄の終電に急いだ。ふと振り向くと菱田さんの姿はもう消えていた。

愛美といい感じになってきたと思ったら、今度は菱田紀子が天女のように夜陰から忽然と舞い降りてきた。こんな夢みたいな事が続けてあっていいのだろうか？

俺は舞い上がるような幸福感を、かみ締めるように帰路を急いだ。

## 二章 ざわめき

「これ、美味しい」約束どおり土曜の夜に俺の部屋に來た愛美は、俺が作ったカレーライスを一口食べて笑顔で言った。

先ほどまで仕事だった彼女は、白っぽいスーツの上着を脱いでいた。少し胸元の開いたブラウスの襟元からは何ともいえない色気が漂っていた。

「口にあつてよかった」俺も笑顔でそう言った。

「隠し味に何かを使っているわね」愛美がカレーを食べながら俺に訊いた。

「さあ、何でしょう？」俺がとぼけると愛美はもう一口カレーライスを口に入れて、よく味わうように咀嚼して飲み込んだ。

「わかんない」愛美が降参という表情で言った。

「そうだね。そのうちに教えるよ」

「やだ、いじわるだなあ」愛美はそう言うともたまたカレーを食べた。いつもは外食だが、たまにはこういうのもいいなと思った。

「そのうちに私も何か作るね」愛美は言った。

「ああ、楽しみにしてるよ」

「ひろしの作った無農薬大豆を使って料理ができるといいな」

「無農薬？ ああ、例の遺伝子組み換え大豆のことか。愛美は本当にいいと思ってる？」

「ええ、貴方が作ったのだつたら例えどうなつても構わない」愛美は恐ろしい事をサラッと軽く言つてのけた。俺の研究している大豆は八工の遺伝子を組み込んで害虫を寄せ付けない作物を目指している。それは確かに画期的な大豆だが、何か大きな問題が起きる可能性も否定できない。

「大切な愛美にそんな事をさせない」

「世に出す時は安全性を充分に確認してからでしょ？ 喜んで食べさせてもらつわ」そう言つて微笑む愛美を、俺は愛おしく思った。

俺は立ち上がったって台所に食後のコーヒーを淹れに行った。豆を引いてコーヒーマーカーをセットしていると、俺のズボンのポケットに入っていた携帯にメールが着信した。今頃誰だろう？と携帯を見ると菱田さんからのメールだった。

「この間はこちらがとうございました。実は私の両親は二人とも六十歳前に癌で亡くなっています。遺伝子を調べれば私も将来、癌になるかわかるのでしょうか？もしわかるなら検査を受けてみたいです。変な相談でごめんなさい。お時間のある時に返信して下さいれば嬉しいです。では」

しばし携帯の画面を見ると、テーブルを片付けていた愛美が声をかけてきた。

「どうしたの？」

「いや、知り合いが癌の遺伝子診断を受けたと言ってきた。何でも両親が癌で早死にしているから心配だって」

「うちの研究所でもできるわよ」

「そうなんだ」

「但しわかるのは、今のところ遺伝性がはっきりしている癌だけね。多くの癌は先天的な要因に後天的な要因が積み重なって複雑に起こるから遺伝子検査には限界があるわ」

「もちろんそうだね。愛美はそれを研究しているんだものね。…そうだ、癌遺伝子についての最新情報があれば、うちでもできる」

「そうね。…じゃあ明日にでもまとまった最新情報が載っている文献を教えるわ」

「ああ、そうしてくれるとありがたい」

コーヒーが入ったので二人でテーブルを囲んで飲んだ。豆は繁華街の専門店で買ってきたモカ・ブレンドで、さっき挽いたばかりの豆で淹れたコーヒーからは芳醇な香りがした。

「うん、これも美味しい」愛美は微笑んだ。

「良かった。これは俺の好きな豆なんだ」モカのコクが俺は好きだった。

「ところで癌を調べたい知り合いつて誰？」愛美が不意をつくように俺に質問した。先ほど着たメールの相手が女性だと勘づいて妬いてくれるなら逆に大いに脈ありというところだが、人がホツとしたところを詰問してくるなんて女つてしたたかというか怖いなと思った。

「アハハ、一応個人情報つてことで勘弁してくれ。別に隠すわけじゃないけど少し名の通った人なんだ」後ろめたい気持ちではなく、真面目に答えた。

「へー、ひろしには結構すごい知り合いがいるのね」愛美は俺のメール相手が政治家か著名人かと思ったのか、感心したようにうなずいた。俺は彼女の勘違いをそのままにしておいて、菱田さんの結果が何の異常もなかったら追々話そう。でも万一、菱田さんが将来癌になる遺伝子を持っていたら永久に俺の胸に留めておこうと思った。

良い雰囲気のうちには夜が更けた。このまま愛美を抱きしめて押し倒してしまいたいと俺は頭の片隅で思ったが我慢した。まだ愛美が俺をどの程度想ってくれているのか自信がなかったし、若い時とは違って最近の俺は行動が慎重になってきていた。もう情熱や本能だけで突つ走る事もできない年齢になったと思つた。そして今夜は更にもう一つ、菱田さんからのメールも俺の情念にブレーキをかけた気がした。

「遅くなったから車で送るよ」紳士的に俺が言うと、愛美は微笑んで「お願い」と立ち上がった。

アパートの隣にある駐車場に停めてあつた俺の愛車、黒のトヨタ・オリスに二人で乗り込んだ。しばらく車を走らせると、「あれ、この道は違うよ」と助手席に座る愛美が言つた。

「いや、この先に景色の良い道があるんだ。そちらを回つて帰ろう

「思ってたね」

「へー」

少し上り坂を上がると小高い丘に公園があつて、そこからは下に広がる夜の街が展望できた。

「きれい」愛美が言った。

「だろ。普段は気づかないけど意外に近くに綺麗な所つてあるものなんだ」俺は路肩に車を停めて言った。

「そうね」そう答える愛美の手を俺は握ってみた。彼女も俺の手を握り返して微笑んだ。

「近くに綺麗な人もいる」俺はそう言つて、今度は思い切つて彼女を抱き寄せた。彼女は少し肩をすくめるようにしたが、やがて俺に身を寄せた。俺の肩の前には愛美の頭があつた。そのまましばらく夜景を見ていた。

彼女の唇を奪いたい、と思つたが今夜はやめておこうと思つた。

「そろそろ送るよ」と車は発進させると愛美をマンションに送り届けた。彼女が住んでいるのは都心の大通り沿いにあるワンルーム・マンションだった。

「今夜は御馳走様でした」車を降りる時、愛美は笑顔でそう言つた。片道三車線の道路には車が行きかつていた。

「お粗末様でした」俺は運転席に腰かけたまま言つた。

「今度は私が何か作るね」

「ああ、楽しみにしてるよ」

「本当にありがとう。おやすみなさい」

「おやすみ」愛美が降車して扉を閉めると、俺は少し格好つけて車を勢いよく発進させた。バックミラーに映る愛美が小さくなって間もなく夜の闇に消えた。

家に帰ると十二時を回っていたが、俺は菱田さんに返事を打つた。

「メールをありがとうございます。感激です。」

さて、ご質問の件は当方で出来る限り手を尽くして検査致します。

準備に少しお時間を下さい。用意が整い次第、またお知らせします。身体には気をつけて、あまり無理をしないで下さいね。取り急ぎお返事まで。では、おやすみなさい」

彼女は俺とは別世界に住む歌手。返事はないだろうと思って俺は風呂場でシャワーを浴びて、出るとテレビの前のソファに腰かけた。さっきまで愛美がいた雰囲気大切にしたいと、今夜は何も片付けずにこのまま寝ようと思った。

ふと俺の携帯が光っている事に気づいた。愛美からメールかな？と思って手に取ると、菱田さんから返信が着ていた。予想以上に早い返信に俺は少しワクワクしながらメールを読んだ。

「お忙しいのにお返事をありがとうございます。自分の将来がわかってしまうようで少し怖いのですが、思い切って検査を受けてみようと思います。ご連絡をお待ちしています。山崎さんこそ、御身体に気をつけてお仕事を頑張ってください。おやすみなさい」発信時刻を見たら、俺が彼女にメールを送ってから十分後だった。俺のメールを見て、すぐに返事をくれたんだ。

「ありがとう。ゆっくり休んで、また素晴らしい歌声を聴かせて下さい。また会えるのを楽しみにしています。おやすみなさい」俺はすぐに返信を打った。

窓の外を見ると空には満月が見えた。この空の下で菱田さんは悩みながら生きているのだろうか？

そう思うとちょっと切なく、早く検査をして安心させてあげたいと思った。

翌週の月曜日はいきなり会議で遅くなった。午後十時過ぎに会社の近くの居酒屋で、さっきまで一緒に仕事をしていた西沢課長と食事をつつビールを飲んだ。今夜は少し暖かくなったが、明日は一雨くるらしい。

「二人以上の女と同時に付き合う時には、絶対に話が被らないよう

にしる。それができないようならするな」西沢先輩は古めかしいが、庶民的な店内でビールを飲みながら言った。

彼は遣伝子操作や診断のプロで理学博士の肩書も持つ切れ者である一方、秘かにジゴロを自称するモテ男だ。俺より四歳年上で妻子もいるが、他にもいろいろと異性関係もある発展家だった。

しかし彼は仕事もできるし、他にいくら女がいても家庭には持ち込まず家族に一切迷惑をかけていない。これは男の甲斐性だと、一向に悪びれる気配はなかった。それに彼は、そんな武勇伝を自慢してふれ回るようなバカな男でもない。出身大学が同じ俺だけに心を許しているのか、折に触れているいろいろな話を時には教育的に時に自嘲的に俺に喋った。

俺は愛美と付き合っているが、菱田紀子とも会うことになりそうだったので、ちょうどタイミングの良い話を西沢さんが始めたと思つて膝を乗り出した。

「話が被らないようにつて、どういう事ですか？」俺が訊くと、西沢さんはおつという顔をして俺を見た。

「お前、二人の女と付き合ってるのか？」西沢さんが悪戯っ子のような眼をして笑った。

「いや、例えばの話です。もしもそういう御身分になれたら、どうするのか？先輩の実体験に基づいたお話を後学の為に聞いておきたいだけです」

「ふーん。……じゃあ訊くが、お前は悲しくもないのに涙が流せるか？」西沢さんが意外な質問を俺に浴びせた。

「悲しくもないのに泣くんですか……。そんな芸当はできないでしょうね」

「だったら、二人以上の女と同時に深い仲になるのはやめておけ」そう言つと西沢さんは目の前にある韓国風牛スジの煮物を口に入れた。

「先輩は悲しくもないのに泣けるんですか？」俺も牛スジをつまみながら尋ねた。口の中に入れた牛肉がでピリツと辛かった。

「ああ、泣ける。君が好きだ。だけど俺には妻子があるから、これ以上はどうにもならない。本当に好きなのは君だが、俺はマイホームの借金を返済しつつ生活していかなくちゃいけない。と言って泣いて別れてもらう」

「うーん、凄い技ですね。自由に涙を流せるなんて、先輩は役者になれそうですね」

「ハハハ、…でも覚えておけ。女こそ涙を武器にしてくる」西沢さんはそう言って笑うと、生ビールの入ったジョッキをグイと空け改めて話を続けた。

「それに女は子宮で考えると言うけど、確かに理論的に説明できない直感や洞察力がある。だから俺は目の前の相手を常に全力で愛するし畏敬の念も忘れない。その尊敬する女たちの武器の一つである涙を、ほんのたまに逆利用させてもらっているだけだ」西沢さんが話し終わってニヤリと笑うと、彼の携帯がブルブルと震えた。彼は携帯を開いてボタンをガチャガチャ押した。どうやらメールが着たようだ。

「女からですか？」俺は半分あてずっぽで西沢さんに言った。

「ああ。最近知り合ったコなんだけど、相談があるとやってきた。

これはいけるな…」西沢さんは素早い動きで返信を打ち始めた。

「いける？」俺が訊くと、

「ああ、女が男に相談したいって言うのは貴方を信頼してます。会いたいですという意味だ。信頼がなければ愛は得られない。でも逆に言うと信頼されれば愛は得やすい。このまま押せば必ずいける」西沢さんが確信するように断言しながら、素早く打ったメールを返信すると俺に微笑んだ。

ふと菱田さんが俺に相談したいと言ってきたメールを思い出した。今の西沢さんの言葉通りなら、俺が押せば菱田さんを落とせるといふこと？

いやいや、そんな事は西沢さんだから出来る芸当なんだ。第一、俺と菱田さんはまだそんな仲じゃないし、彼女は俺にとって雲の上

の女性だ。

「今夜はずっとお前と飲んでいた」西沢さんが急に真顔になって俺に言った。

「え？ ああ、後から誰に訊かれてもそういう事にしておきますから、どうぞ女と会って来て下さい」俺は彼の言わんとすることがわかって苦笑した。

「お前も随分ものわかりが良くなったじゃないか。じゃあ、そういう事で宜しく。…ああ、ここは俺が払っておくよ」西沢先輩が伝票を鷲づかみにして立ち上がった。

「俺の話が長引いて朝まで飲んでいたことにしておきます。どうぞ、ごゆっくり」俺は数回会ったことのある西沢さんの奥さんの顔を思い浮かべて言った。彼女は眼鼻の通った美人で愛想も良く、西沢さんはこの女性の何が不足なんだろうと思った。

「ハハハ、じゃあまた明日」西沢さんは高笑いを残して慌ただしく夜の街へ颯爽と去って行った。

西沢さんは仕事もできるし何事においても活動的な人だ。昔から英雄は色を好むと言うけれど、英雄になれるだけの活動力のある人だから、なせる技なんだろうなと思った。そして概して世の中は、女も金も持てる者には何故か集まる気がした。

皿を片づけに来た若い女店員に「梅酒のロック」と注文して、俺は愛美と菱田さんにメールを打った。愛美には今日の昼、約束どおり癌遺伝子の最新文献をメールで送ってくれたお礼と、今度会える予定のお伺いの文章を考えながら打って送信した。

その後、菱田さんには癌の遺伝子検査の目途が立ったので具体的な検査日程を尋ねる内容の文章を打って送信した。二通のメールを、西沢さんの言ったように『話が被らない』ように注意して書いた。

メールを送り終わってからデザート代わりに頼んだ梅酒のロックを飲みほして店を出た。外は春の雨が小ぶりに降っていたが寒くはなかった。

帰宅途中の地下鉄の座席に座って電車で揺られた。コトコトと規則的な揺れは、酔った身体に眠気を誘った。五つ目の駅に着くと愛美から返信が着た。

あなたの役に立てて嬉しい。明後日の夕食を街で一緒にできない？という内容だった。俺は膝の上の鞆からシステム手帳を取り出して日程を確認した。

九時過ぎなら会えると返信した。駅で降りて自分のアパートに徒歩で向かった。駅から家までは十分ほど歩く。

自分の部屋に帰り着くと、鞆をソファに投げ出してスーツとネクタイ、シャツを脱いで風呂に湯を張った。少し酔っていたが帰り道で冷えた身体を温めたかった。

久しぶりにゆっくり風呂に入って出たら携帯が光っていた。画面を確認すると菱田さんから返信が着ていた。

『ありがとう。勝手に言わせてもらえるなら、明後日の夜に時間が取れます。その後は仕事で東京に行って土曜日の夜遅くに帰ってきますから、日曜は昼までなら大丈夫です。検査は平日がいいですか？ 山崎さんの御都合を聞かせて下さい。お手数をかけてすみませんが、宜しくお願い致します』

「明後日か…」ついさっき、愛美と会う約束をした日だったので、俺は思わずつぶやいた。どうしたものか…

『明後日の夜だと、残念ながらかなり遅い時刻にしか会えません。明日か明後日の昼間でもいいですよ。検査は血液を十ccほど頂くだけです、それ程お時間は取らせません。一週間ほどで結果が出ると思います。また返事を下さい。出来る限り菱田さんの都合に合わせてます』

二人の女性の都合が被らないように、よく注意しながら文章を考えてメールを打って菱田さんに返信した。数分後、知らない携帯番

号から電話がかかってきた。出てみると菱田さんだった。

「夜遅くにすみません。この間、山崎さんが携帯電話の番号まで私に下さったので悪いかなと思ったけど、お電話さし上げました。よろしかったかしら？」菱田さんは恐縮したように、でも切羽詰まったような声で切りだした。

「全然かまいません。むしろ嬉しいくらいです」これは俺の本心だった。

「ありがとう。あなたからのメールを見て、早い方がいいと思ってお言葉に甘えて明日の午前中はどうぞでしょう？」

「場所にもよりますが、朝九時に会社でミーティングがあるので、その前か昼前の十一時過ぎなら時間が空けられます」

「そう…、十一時過ぎに繁華街近くでもいいかしら？」

「いいですよ。何処で採血しましょうか？」

「そうね……、スイングがいいかなあ。あそこなら昼間はお客さんもないし」

「いいですね。では午前十一時にスイングで」

「はい、宜しくお願いします。本当にありがとう」

「いえ、菱田さんに会えるのを楽しみにしています。俺は喜んでやっていますから気にしないで下さい」

「そう言ってもらえると少し気が楽になったわ。長々すみません。ではおやすみなさい」

「おやすみなさい」電話を切ると俺はウキウキした気分になった。

明日は会社に行って採血キットを持ってスイングに行こう。そうしたらまた菱田さんに会える。しかも個人的にだ。

早く寝ようとベッドに入ったが興奮しているせいか寝つけなかった。菱田紀子のCDを聴こうかと思ったが、ますます興奮しそうな気がしてFMをつけた。

渋いジャズが流れていた。学生時代によく聴いたブルーノート・ジャズだった。思わず部屋にあったウイスキーを出して徐々にストリートであおってみた。菱田紀子と愛美の予定がバッテリーングしそ

うな危機は無事に乗り切れたし、明日は菱田さん、明後日は愛美に会える。そんな幸福感に酔いながらグラスを重ねるうちに、いつの間にかFMからはヘレン・メリルの『恋に落ちた時』が流れた。

「私が恋に落ちたら、永遠に貴方を愛すわ」菱田紀子が俺に切なく唄ってくれているような気がして胸がキュンとした。

翌日は春の日差しに包まれた。俺は約束通り会社でのミーティングを済ませると、採血キットを入れた鞆を持って慌ただしく繁華街の片隅にある『スイング』へ車で出かけた。道は年度末のせいか混雑していたが、近くのコイン駐車場に車を停めてスイングには十一時十分前に着けた。

昼間に『スイング』を見るのは初めてだった。いつもとは違った気分で入口の扉を開けると、ガランとした店内のテーブル席に菱田紀子がジーンズ姿で腰かけて本を読んでいた。俺を見ると彼女は微笑んで立ち上がり「今日はすみません」と丁寧にお辞儀をした。胸元の開いたシャツから銀色のペンダントが光り、その奥には形のよい胸が垣間見えた。

「早速、採血させて下さい」俺はそう言うとテーブルの上にゴムの駆血帯と注射器を出した。

「何だか緊張します」そう言って菱田さんがシャツの袖をめくって右腕をテーブルに出した。

「次の此処でのステージはいつですか？」俺は彼女をリラックスさせようと話題をそらしながら、駆血帯を彼女の腕に巻きつけた。初めて触れた彼女の腕は柔らかくスベスベして心地良かった。

「来週の木曜です。あ、針を刺す時、言っして下さいね」菱田さんは目を自分の腕からそらした。

「刺します」俺はそう言っ針を彼女の静脈に刺した。暗赤色の静脈血が注射器の中に勢いよく吸いこまれ、俺はほっとした。もし失敗したら、また彼女に針を刺し直さなければならぬ。そういう事

態が避けられたので単純にほっとした。

採血が終わって駆血帯を外して酒精綿で採血跡を圧迫した。

「一週間以内に結果が出ます」俺は努めて事務的に菱田さんに言った。こういう事は感情を入れずに話した方がいいと思った。

「ありがとう。…検査代はいくらお支払いすればいいかしら？」

「いりません。ただ、お願いがあります」

「何？」

「もしも検査で血液が余ったら凍結保存して、今後の俺の研究に使わせてもらえませんか？ 具体的に今すぐ何かに使うわけではあ

りませんが、将来女性の血液を使う研究に少しでも多くの資料が要るんです。個人情報には絶対に特定されないような研究にしか使いません」

「いいわ、山崎さんを信じてる」そう言って菱田紀子は微笑んだ。

俺を信じてる…

『信頼がなければ愛は得られない。信頼されれば愛は得やすい』西沢先輩の言った言葉が俺の頭によみがえった。

「来週の木曜には菱田さんの歌を聴きに此処に来ます。で、その後あの…、また食事に行きませんか？」俺はかなり勇気を振り絞って言ってみた。胸はドキドキと激しく鼓動した。

「いいわよ。その時には私の結果が出るわね」意外にあっさりと菱田さんが承諾してくれた。

「結果が悪いかもと心配するより、良いと信じて明るく前向きに過ごしましょう。クヨクヨしても楽しくしても結果は同じですから、クヨクヨ過ごすのは損です」俺は彼女に言った。

「そうね、貴方の言うとおりね。よし、じゃあ木曜には祝杯を上げましょう」菱田さんが笑った。

「そうですね。じゃあ、俺はこれで。これを出来るだけ早く検査に出したいので」

「宜しく願います」立ち去る俺の背中に、菱田さんは深々と頭を下げた。

次の日の夜、繁華街のレストランで九時に俺は愛美を待った。何だか最近の仕事も何もかも張り切つてできる。女を愛するつていいものだと思つた。明日から菱田さんは東京だなど彼女の楚々として端正な顔と長い黒髪を思い浮かべながら、取りあえず頼んだビールをチビチビ飲んでると十分程して愛美が現れた。

「ごめんね。待った？」グレーのスーツを着た愛美が慌ただしく俺の前に腰かけた。偶然だが、この日は俺もグレーのスーツを着ていた。

「いや、今ビールを飲み始めたばかりだよ。この間は文献をありがとう」

「うん、ちょうど先月の専門誌に特集があつたからタイミングが良かったわ」そう愛美が言つたところで店員がやつて来た。俺は愛美にビールと本日のコースを二人前、注文した。

昨日、菱田さんの血液は馴染みの検査会社に愛美からもらった文献と一緒に「この血液からこの文献に載っている癌原因遺伝子を洗い出して下さい」と注文を付けて渡してきた。

「それにしてもカップルが多いわね」愛美は店内を見回すと、出されたビールを飲んで微笑んだ。

「そう言えばそうだね」

「窓際のカップルなんて並んで座つてイチヤイチャしてる。よくやるな」そう言つて愛美は笑つた。俺もそちらの方を見ると確かに身体を密着させて仲良くパスタを食べている若いカップルがいた。

「若いからね。愛美は、ああいうのがうらやましいの？」俺は訊いた。

「うん、ちよっぴりね。でもそういう人ができて私も照れくさくてできないね、きつと」

「そうだね。俺も照れくさいよ」

「イタリアの男だったら照れずにやるかもね」

「そうかも。あ、でもイタリア男はマザコンが多いって聞いた事が

ある」

「へー、そうなんだ」愛美が出てきた前菜のサラダを食べながら口をつぼめて感心したように俺を見た。

「俺の大学院に来ていたオーストラリア女子留学生なんだけどね、交際していたイタリア男に、世の中で一番好きな食べ物は？と聞いたら平気で、ママの作ったパスタって答えた。シヨックだったと言っていた」俺は若かりし大学院時代を思い出して話した。

「アハハ、確かにシヨックかもね。……私はひろしが作ってくれたカレーライスが好き。美味しかった」

「ありがとう。作った甲斐があつたよ」

「隠し味に何を使ったのか教えてよ」

「そんな事をよく覚えていたね」

「あれからずっと気になっていたの」そう言つて愛美は大きな眼を輝かせた。俺は彼女の瞳に吸いこまれそうな気がした。いや、正確には吸いこまれないと思つた。少し前かがみになった彼女の白いブラウスの胸元から胸の谷間がチラリと見えて色っぽかった。

「実は赤味噌。尾張生まれの俺は赤味噌が好物なんだ」俺の母親がカレーに入れていたのを真似たのだが、ついさつきイタリア男のマザコン話をしたばかりだったので詳しい説明はしなかった。

「そうなんだ。ちょっと思いつかない隠し味ね」東京出身の愛美には考えもつかないスパイスだったのだろう。彼女はとても感心したように俺を見た。俺が考案した料理法だと愛美が誤解しているようだったので、何だか照れくさかった。

料理はパスタ、子牛のスカロツピーニと次々に出された。俺たちは赤ワインをグラスで注文した。

「この料理、いけるわね。でも肉料理にかなりガーリックを入れてるみたい。明日臭うかも」愛美が自分の口に手を当てて笑つた。

最近の彼女はよく笑う。彼女の笑顔を見ていると、俺も楽しくなれる。

「あ、俺、無臭にんにくエキスを持ってる。飲んでおこよう」俺はシンプルな黒のビジネス・バッグに入れてあったプラスチックの小瓶を出した。

「ガーリックを食べて、にんにくエキスを飲むの？」愛美が怪訝な顔をした。

「ああ、無臭ニンニクには大抵スコルヂニンと言う成分が入っていて特有の臭いを消しているんだ。発見したのは確か日本人だよ。これを摂るとニンニクの臭いがある程度消える」そう言って俺は小瓶から無臭にんにくエキスの錠剤を二粒出して、一つは自分で飲み、もう一つは愛美に手渡した。

「へー、毒には毒をもって制す。ニンニクにはニンニクをもって制すのね。さすがひろしは農学博士ね」愛美も錠剤を口に含んで水で飲んだ。

「でもニンニクで精力がつきすぎて眠れなくなったらどうしよう」愛美がそう言ってまた笑った。

「朝まで語りあかそう」酔っていたせいかわ俺は大胆な事を澄まして言ってみた。

「うーん、夜明けのコーヒーをひろしと飲むのも悪くないわね」愛美も酔っているのかサラツと答えた。俺は愛美をベッドの上で抱き合う姿を想像してしまっただが、「でも明日も早朝から仕事だから、またの機会にね」と愛美が言ったので、ベッドの妄想は頭の中から消した。

食後にはドルチェと紅茶を頼んだ。

「ひろしはコーヒーが好きなのに紅茶でいいの？」出てきたドルチェはテイラミスに生クリームが乗り、脇にはイチゴが彩りを添えていた。一緒に紅茶も出てきた。

「本当はエスプレッソを飲みたいところだけど、今から眠れなくなると嫌だから紅茶にした。…明日の仕事を考えて今夜は守りに入っているのかな」と俺が苦笑すると、愛美は可笑しそうに笑って答えた。

「それは良い考えね。三十にもなると、人間は守りに入るのかもね」  
「俺はまだ三十になってない」  
「もうすぐ三十歳でしょ。同じようなものよ」と言っただけで三十歳の愛美はまた笑った。食事が終わると店を出て愛美と手を繋いで地下鉄の駅に向かった。もう十一時を回っていた。  
いつものホームで地下鉄を待った。今日は俺の乗る列車が先に着た。

「また週末に会えるかな？」俺は愛美に訊いた。

「うん、土曜日はまた仕事なんだけど日曜は空いてる。ひろしは？」

「俺も土曜日は仕事。じゃあ、日曜日に朝から何処かへ行こう」

「…お花見なんかができるといいなあ」

「グッド・アイディアだ。車で迎えに行くよ」

「わー、楽しみ。また連絡して」

「ああ」俺が地下鉄に飛び乗ってそう答えた時、列車のドアが閉まった。俺たちは小さく手を振り合つと、俺を乗せた列車が発車した。お互いの姿が見えなくなるまで手を振り合つた。

### 三章 ときめき

二日後の金曜日に俺は菱田さんの検査を依頼していた会社から「結果が出たから報告書を取りに来て下さい」との電話を受けた。

「結果はどうでしたか？」どうしても早く結果を知りたくて俺は電話の向こうにいる顔馴染みの検査技師に訊いた。彼は二年来、俺の研究の検査を手伝ってくれている大橋という三十代半ばの男だ。

「ああ、まったく異常はなかったです。余った血液はいつものように凍結しておきました」

「ありがとうございます。なるべく早く取りに行きます」そう言って俺は受話器を置いた。よかった。本当によかった。俺は小躍りしたいくらい嬉しかった。

「何の検査だ？」隣のデスクで仕事をしていた西沢先輩が俺に声をかけてきた。

「いや、知人に頼まれた個人的な要件なんです」

「へー。お前の顔がニヤけていたから、てっきり女からの電話かと思っただ」

「先輩と一緒にしないで下さい」俺は真顔を作ると言い返した。

「そうやって、ムキになるところが益々怪しいぞ。まあ、困ったらいつでも相談に乗ってやるからな」西沢さんは笑って自分の仕事に戻った。デスクの上のコンピューターを操る彼の目は真剣になった。そんな姿を見て、彼はオン・オフの切り替えがしつかりした男だ、と思った。

俺は自分の仕事を後回しにして、取りあえず菱田さんの結果を取りに検査会社に車を走らせた。外は春の日が注いでいた。俺の気は急いでいたが、気分は明るかった。

城の近くを通り抜けると堀内公園の桜がチラホラ咲いていた。日

曜日には明るい気分で愛美と花見を楽しめそうだ。城の北側にある検査会社に着くと、俺は走って事務所に行って検査報告書を受け取った。十枚ほどのA4用紙が束になって色気のない茶封筒に入っていた。それと凍結された検査用スピッツが、銀縁眼鏡の奥で冷静な目をした大橋検査技師から手渡された。

「ありがとう」と俺が言うと彼は表情を崩し、「とんでもない。いつもお世話になっていきますから」と人懐こく答えた。

「近々、飲みに行きましょう」俺は彼にもう一度お礼を言って外に出ると、早速封筒から検査結果を出して読んだ。

検査の結果はいずれも陰性、菱田さんの遺伝子からは何も異常が見つからなかった。俺は用意した小さなクーラー・ボックスに凍結血液のスピッツを仕舞うと車を走らせて帰社した。西に傾きかけた春の日差しが心地良かった。

帰社した後、もう一度検査結果をくまなく確認して俺は携帯から菱田さんにメールを打った。

『お仕事、お疲れ様です。先日の検査結果が出ました。癌遺伝子はまったく見当たりませんでした。良かったです。ホッとしました。』

東京はいかがですか？ 来週の木曜日には菱田さんの素晴らしい歌声と、その後の食事を楽しみにしています。ではまた』

一時間後に菱田さんから返信があった。

『ありがとう。本当に安心しました。明日の夜には帰ります。もし良ければ中央駅で待ち合わせて、祝杯をあげませんか？』

俺にとっては望外の嬉しいメールだった。仕事は立て込んでいるが、何としてでも菱田さんと飲みに行きたいと思ったので八時に待ち合わせることにした。

その後は土曜の夜まで、仕事を一心に頑張った。俺は忙しくも、とても充実していた。

土曜日の午後八時に、俺は会社から慌ただしく中央駅に到着した。菱田さんは八時五分着の新幹線で着くはずだったので、何とか間に合った。約束した時計台の近くで待っているると新幹線が着いたのか、人々が一団となって改札口をくぐった。

背の高い菱田さんが黒っぽいコート姿に銀色のキャリーバッグを引いて現れた。

「長旅、お疲れ様でした」俺が言うと、菱田さんはニッコリ笑って、あなたこそお仕事お疲れ様でしたと言った。彼女の笑顔を見て、俺は疲れが吹き飛んだ。

「駅前のタワー・ビルの天辺にあるレストラン・バーを予約しておきました」俺が彼女のキャリーバッグを持ってそう言うと、菱田さんはロマンティックね、と微笑んだ。駅前の大通りを横切るとタワー・ビルがあり、ショッピングやレストラン街、その上にある外資系ホテルがある。そして最上階にはレストランが三軒あった。

ビルのエントランスの一番奥にある高層階直通のエレベーターで、地上三十八階まで一気に上った。レストラン・バーの入口では、週末のせいか三組のカップルが待たされていたが、俺は今日の昼間に予約を入れておいたので窓際の席に案内された。

「綺麗」席につくと菱田さんが眼下に広がるキラキラした中央駅と市街を見て言った。七時頃に俺は会社でコンビニ弁当を、菱田さんは新幹線の中で駅弁を食べたと言うので、チーズの盛り合わせと野菜スティックを注文した。

やがて出された白のグラスワインを手に持ち二人で乾杯した。

「今夜は君の瞳に乾杯って言わないの？」グラスを合わせた後、菱田さんが俺に微笑みかけた。

「また同じことを言うのは芸がないかなと思って……でも菱田さんと祝杯が上げられて本当に良かった」俺が前に言ったセリフを菱田さんが覚えていてくれたのも嬉しくて、俺は心からの笑顔で答えた。「ねえ、菱田じゃなく紀子と呼んで」グラスのワインを四分の一ほど一気に空けた菱田さんが俺の目を見て妖しく微笑んだ。夜景が彼

女の黒い瞳に映って輝いた。

「はい。じゃあ、俺の事もひろしと呼んで下さい」俺もワインを飲んでから言うと、菱田さん、いや、のりこが嬉しそうに頷いた。

「ひろしは私から癌遺伝子が見つかったら、どうした？」紀子がまた俺の目を見て言った。

「治療する手立てがないか、必死に探すと思います」俺は少し考えながら言った。

「それは学問的な興味で？」紀子が視線をふと夜景に移して訊いた。

「いえ、紀子さんを失いたくないからです」

「のりこと呼んで」また紀子が俺を見た。

「のりこを失いたくない」俺は言い直した。

「どうして？」紀子の鋭い視線が痛いほど肌に突き刺さった。

「のりこの歌声をもっと、そしてずっと聴いていたいから」

「それだけ？」

「いや……、こうして紀子と会って話もしたいから」そう俺が言うと、紀子は満足そうに微笑んでワインを飲みほした。俺は赤ワインを二つ、ボーイに頼んだ。

「もしも癌遺伝子が見つかって、自分が何歳くらいに死ぬか、わかっってしまったら、ひろしはどうする？」紀子が俺に訊いた。

「そうだな……。死ぬ年齢まで悔いのないように一生懸命すごすと思う」

「今は一生懸命に生きていないの？」

「いや、それなりに生きていますつもりだけど……」俺は言葉につまった。

「でしょ。検査の結果が出るまで、正直こわかった。でも、その間に改めて人生について考えることができた。検査の結果が異常なくて本当にホッとしたけど、それ以上にいろいろなものを得られたわ」紀子が小さく笑った。

赤ワインが運ばれてきてから、俺たちは音楽の話をした。俺が好

きなヘレン・メリルという女性ジャズ歌手を、紀子も知っていた。紀子は大学時代にクラブで唄うアルバイトをしたところを見出されて、ジャズ・バーでプロとして唄うようになった。その頃はヘレン・メリルの唄い方に少なからぬ影響を受けたと話した。

彼女は大学を出てからは本格的に東京に進出して、アルバムも出し数カ月の渡米もしたがオリジナル曲はなかなか売れず、今はまたクラブ歌手になっていると話した。

「俺は紀子の歌が好きだ。魂を揺さぶられる」

「ありがとう。でも今の唄い方には壁があつてね、それをどうやったら乗り越えられるのか模索中なの」

「…努力する事は素晴らしい。前へ進むうとする人間は輝いていると思う」

「でも努力が報われない歌手も数多く見てきたわ」紀子は早いピッチで二杯めの赤ワインも空けた。紀子はボーイを呼んでドライマテイーニを頼んだ。俺もスコッチを水割りで頼んだ。つかの間の沈黙が二人を包んだ。二人とも眼下の夜景をぼんやりと見ていたが、でもそれは言葉を交わさなくても心地の良い空間になっていた。

「ひろしは今の仕事が面白いと言ったよね」新たな酒が運ばれてくると、沈黙を破って紀子がマテイーニを一口飲んで口を開いた。

「うん、やりがいを感じる」

「いいね。仕事ができる男って魅力的よ」紀子が再び俺を見つめて微笑んだ。

「いや、あんまりバリバリできるって方でもない」俺はバリバリ仕事もこなす西沢先輩を思い浮かべて頭をかいた。

「そこがいいのよ。あまりにガツガツしている男って油断ならないわ。女に対してもそう」

「と言つと？」

「男にガツガツされる雰囲気を見ると女は引くの」

「…でもあんまりガツガツしないと、押しが弱くて何も始まらない」  
実際、俺は学生時代から付き合っていた女性と三年前に別れて以来、

彼女はいなかった。仕事をしていると出会いの機会が少ない。愛美と知り合い最近になって少しいい雰囲気になったのが、久しぶりの男女交際だった。そして今は、彼女にどの程度押し迫ればよいか、日々逡巡している。そういう思いを思わず吐露した。

「フフ、ひろしは私を口説こうと思わないの？」紀子がマティーニをグイと飲むと、俺を見て笑った。彼女は少し酔ってきたようだったが、妖しく潤んだ瞳に俺はドキツとした。

「俺なんかが偉大な歌手の紀子を口説くなんて役不足だよ。それに俺たちはまだ個人的に会うのは二回目、手も握らない中学生みたいな清い交際をしている…」俺は控えめに言った。

「アハハ、今どき中学生なら手以上のモノを握っているわよ」紀子が意味深な笑みを浮かべた。

「じゃあ、小学生？」

「小学生でも手くらい握っているわよ、アハハ」紀子は可笑しそうに笑った。

「私を上辺だけ大事にしてくれる人は結構いたわ。そういう人に裏切られた事もある。…でもね、ひろしは違うと思った」紀子は思い出したくない過去があるようだ。そんな過去から目をそむけるように、俺から夜景にゆっくり目を移して言った。

「どうして？」俺は尋ねた。

「わかるの」紀子は夜景を見たままそう言った。

紀子のグラスが空になったので、俺は「お酒は？」と訊いた。彼女は「もういい」と答えたので、俺は残った水割りをグイツと飲み干してからボーイに会計を頼んだ。

しばらくしてボーイが持ってきた伝票を、紀子が「払わせて」と奪った。

「ご馳走様でした」バーから出ると俺は紀子にお礼を言った。

「これくらいはさせて。またお食事に連れて行ってね」紀子が微笑んだ。

それから彼女は右手の奥にあるトイレを見つけ「ごめん、トイレ」と言った。

「俺もトイレに行く。出たらそこで待ってる」

俺はトイレから出るとすぐ前の廊下で紀子を待った。奥にあるレストランはもう閉店していて、廊下は夜遅いせいかな通りはなかった。

やがてトイレから出てきた紀子が笑顔で俺のすぐ目の前まで歩み寄って来た。酔っていたのか、俺は大胆にも彼女を抱き締めて目の前にあつた紀子の唇を奪った。彼女は素直に俺に抱かれると目を閉じた。

やや厚めの紀子の唇は思ったより柔らかくて心地よかった。彼女の唇を軽く吸っていると、自分が彼女に吸い込まれてゆくような気がした。約十秒後、俺は紀子から唇を離した。

「おや？ 手も握らないんじゃないの？」そう言って紀子は俺の腕の中で妖しく微笑んだ。

「ごめん」俺がエレベーターへ向かおうとすると、彼女がニコヤカに腕を組んできた。

俺たちはビルから出て駅の雑踏を地下鉄の駅に向かって歩いた。俺は酔っているのと幸福感で、フワフワと雲のじゅうたんの上でも歩いているような気分だった。

「ひろしってモテるでしょ」横にいる紀子が歩きながら言った。

「俺は彼女いない歴も長かったしモテないよ」

「モテる男は、自分の事をモテるなんて言わないものよ。貴方には妙な色気と余裕があるから、きっとモテる」紀子がフフと笑った。

やがて歩道から階段で地下に下りた。俺に妙な余裕があるとしたら、それは愛美がいるから紀子にガツガツ迫らずにいられるからだろう。何となく俺はそう思った。

地下鉄は、紀子は繁華街、俺は東部住宅街方面に別れて乗る。切符売り場でそれぞれ切符を買ったら、紀子が「今日はありがとう。とても楽しかった。またね」と俺の手を握って微笑んだ。

「ありがとう、俺も楽しかった」

まだこのまま君と一緒にいたい、という言葉を読み込んで俺はそう言った。紀子の乗る路線の改札口まで一緒に行こうとすると、彼女は「ここでいい。これ以上来ないで。哀しくなっちゃうから」と言っただけで立ち止まった。

こういう場面で愛美は最後の瞬間まで俺が見送るのを好む。紀子は違うんだ、と俺は思った。

ふと俺は大学院時代、一緒に仕事をした外国人たちの事を思い出した。俺の通った大学院にはオーストラリアやイギリス、中国からの留学生がいた。彼らは別れ際に「じゃあまた」と言った後、例外なく振り返らなかった。綺麗な英語曲を唄う紀子は、その中身も日本人離れしているのかな、などと思いつつ俺もそうすることにした。「気をつけて。じゃあまた」と俺は言っただけで踵を返すと振り返らず、真っ直ぐに一階下の地下鉄ホームへ駆け降りた。

翌日は愛美と花見に行く約束をした日曜日だった。昼に愛美をマンションに車で迎えに行き、それから城内公園近くの堀端にあるコイン駐車場に車を停めて二人でブラブラ歩いた。堀の両側には大きな桜が立ち並び、たくさんの人々がそぞろ歩いていていた。

「桜の木の下には死体が埋まっているという文章があったよね」愛美がポツンと言った。

「ああ、昔どこかで読んだな」

「梶根基次郎の詩だったと思う。殺風景な冬から春になって突然、一斉に咲く桜って本当に狂ったように綺麗だよ」ピンク色に咲き乱れる桜を眺めながら、愛美はしみじみと言った。狂ったように咲きほこる桜に気押されるように、俺たちはどちらからともなく手を繋ぎ合っただけで黙々と歩いた。愛美の手は春の日差しのように暖かかった。

やがて城門に着いた。

「中に入ろうか？」城内への入場券売り場の近くで俺は愛美に言っ

た。

「…今夜はうちで食事をしない？」彼女は遠く城門越しに見える桜を眺めながら、ゆっくりと言った。そして

「肉ジャガでよければ」と言い足して俺を見た。

「喜んで」俺は飛び上がりたいほどの嬉しさを押し殺すように普通に普通に答えた。

それから二人で駐車場に戻り、俺の車で十五分ほど走った大通り沿いにある愛美のワンルーム・マンションへ行った。

近くのコイン・パークに車を停めて、小綺麗なエントランスを抜けてエレベーターで七階に上った。五つある黒い玄関のうち、一番奥が愛美の部屋だった。

初めて入る彼女の部屋は、玄関を入ると左手にトイレとユニットバスがあり、右手の小さなキッチンを通り越すと八畳ほどの部屋の中央にコタツ兼用のテーブル、周囲にはベッドとライティングデスク、本棚が整然と並んでいた。

「狭いでしょ」愛美は恥ずかしそうに微笑んだ。

「いや、綺麗にしている」

「今から準備するわね。そこに座っていて」

「ありがとう。でも手伝うよ」俺は愛美とキッチンに立った。コンロの上の鍋には肉ジャガが入っていた。

「もう作ったんだ」俺が言うと、

「うん、よく味が染み込むようにと思って今朝つくった。たまたま早く起きられたから」愛美が少し恥じらいだように言った。俺のために早朝から準備をしてくれた彼女を可愛いと思うのと同時に、昨晩は紀子と飲んで今朝はなかなか起きられなかった自分を思い出した。

二人の女性から想いを寄せられている今の自分を幸せ者だと思った。同時にこういう幸福な状態を維持するのは、西沢先輩が言っていたように相当な労力が必要ののかも知れないと思った。

「今からご飯を炊いて、お味噌汁と湯豆腐を作る予定なの」愛美が続けて言った。

「へー、盛りだくさんの献立だ」

「もしよければ、ご飯を炊いてくれる？ その間に、味噌汁も湯豆腐も作っちゃうから」

「そんなに早くできるの？」

「味噌汁も湯豆腐も、あんまり時間をかけて作るものじゃないわ。

味噌は煮立て過ぎるとビタミンCが壊れるし、豆腐もあまり長く煮るものじゃない。あ、湯豆腐にはタラと白菜も入れるわね」

「なかなか凝った湯豆腐だね」俺は愛美の指示で米を研ぎ炊飯器にかけた。その間に愛美は昆布を敷いた土鍋に湯豆腐の用意をすると別の鍋を出して大根と油揚げを刻んで味噌汁を作り始めた。

「あ、お味噌が合わせ味噌しかない。ひろしは赤味噌党だったわね」手早く炊事をしていた愛美が手を休めて俺を見た。

「いや、いいよ」

「うっかりしてた。ごめんね」

「全然いいって」俺は笑って答えると、また愛美が「あっ」と口に手を当てた。

「今度は何？」

「ひろしは車だからビールなんか飲めないね。どうしよう…」

「アハハ、お茶か水でいいよ」

「……向かいに酒屋があるの。洒落たジンジャエールを売っていてシャンペン代わりになるから買って来てくれない？」愛美がバッグから財布を出そうとした。普段はバリバリと仕事をこなすキャリア・ウーマン風に振舞っている愛美だったが、意外に可愛い面をたくさん持っていると思った。

「いいよ。俺が買ってくる」そう言うと俺のポケットの携帯が震えた。何だか愛美の前で携帯を確認するのが嫌で、俺は何事もなかったように上着を取ると部屋を出た。

エレベーターに乗ってから携帯を出して見ると、紀子からのメールが着ていた。

「昨日はありがとう。楽しかった。ところで今度の木曜日だけど、どうしても抜けられない用事ができちゃった。また連絡するけど、その次の木曜日に会いたいと思ってる。勝手を言っつてゴメンね」

俺はすぐに「昨日は俺も楽しかった。ありがとう。木曜の件は了解気にしないで」と素早く返事を打って送信した。紀子はやはり俺とは別世界に住む忙しい歌手、俺は愛美を第一に考えよう。そして今は愛美だけを愛そう。まさにその時だ、と思った。

マンションを出て通りに出た。なるほど、大通りの向こうに大きな酒屋があった。すぐ右手の信号を渡ってシャンペン代わりになるジンジャエールを探した。結構大きな店で、店内はワインから日本酒、焼酎がたくさん並んでいた。品ぞろえが豊富なのだろう。多くの人々で賑わっていた。なるべくシャンペンっぽい辛口ジンジャエールを十分ほど探し回ってから購入すると愛美の部屋に戻った

愛美と二人で食べた手料理はどれも美味しかった。いつもは外食やコンビニ弁当が多い事を気遣って栄養に配慮した愛美らしいきめ細かいメニューだと思った。味噌とジンジャエールは彼女の計算外だったようで、完璧ではないところも今はむしろ好ましかった。

その晩、俺たちはどちらからともなく自然に愛美のベッドの上で結ばれた。初めて触れた愛美の唇は紀子よりも硬かった。暗がりで見ると愛美の胸は形よく、身体は透き通るように白かった。俺たちは互いに互いを待ちかねたように求め合い果てた。

狭いベッドの上に二人で眠ったが、夜明けとともに起きた。そして前に二人で話したように夜明けのコーヒーを愛美と飲んでから、俺は出社準備のために自分の部屋に戻ることにした。

「じゃあまた。御馳走様でした」玄関で俺は愛美を抱きしめて軽くキスをした。

「ええ、またね」愛美は微笑んで俺を見送った。俺はとても幸せだ

つ  
た。

## 四章 流転

それから慌ただしく一週間が始まった。契約農場で品種改良した稲を育て始めたし、遺伝子組み換え大豆も本格的な種まきシーズンを前に完成が急がれていた。

夜遅くまで仕事をして、家に帰るとグッタリして寝て、また朝になって出かける日々が三日間続いた。紀子と愛美には火曜日の夜にメールを送ったが、珍しく二人とも返事を送ってこなかった。

この前の土日に二人とも一気に俺との距離が縮まったと思ったのに、今夜は二人から一気に冷たくされたような気がした。やはり俺には二人の女性を同時に愛するなんて器用な真似はできないのかな、と思った。

木曜日の午後九時前、俺は会社でコンビニ弁当を食べながらコンピューターに向かって仕事をしていた。この夜は本来スイングで紀子の歌を聴いているはずだったが、ネットで確認したら彼女のステージは中止されていたので俺は自分の仕事を片付けるべく残業していた。

そんな時に愛美から携帯に電話があった。隣のデスクには西沢先輩がまだいたので、俺はオフィスから廊下に出て電話を取った。

「もしもし、いきなり電話なんて珍しいね。あ、この間は御馳走様でした」俺は愛美が電話をくれたことを喜びながらも、周囲に気遣って少し小声で答えた。

「ごめんなさい。少し急いでたものだから。……私さ、白血病になっちゃった」愛美は努めて押さえたように普通の声で言った。だが、俺は電話機を落としそうなくらい驚愕した。

「白血病？ いつ？」

「火曜日の仕事で、階段を駆け上ったら貧血で倒れたの。すぐに意識は戻ったんだけど、皆が心配して近くの病院に連れて行かれたの。

血液検査を受けたら、完璧な急性白血病ですと宣告されて、そのまま入院しているの」

「大丈夫なのか？」

「明日には日本でも有数の血液内科がある尾張大学病院に転院して来週の月曜日から抗がん剤による化学療法が始まるの。もしもそれで状態が落ち着いて骨髄移植をすれば助かるかも」愛美は淡々と話した。

廊下の隅に立って電話している俺の脇を、西沢先輩が手を上げて帰って行った。俺は先輩にひきつった顔でちょこんと頭だけ下げた。「骨髄移植？」俺は電話機に囁きかけるように、愛美に問いなおした。

「そう。でもHLAという白血球型が一致する人からしか移植を受けられないの。近しい血縁と合致する可能性が高いんだけど、残念ながら私の両親、弟、伯父、叔母、五人いるところは全部だめだった」

「つまり、移植できる骨髄提供者の当てがないということだ。……骨髄バンクという組織があるって聞いた事があるけど？」

「それも探してもらったけど現在は該当者なしとの返答だった。仕方ないわね。確率的には数万人に一人くらいしか合致しないそうだから」

「……俺、探す」

「探すって、どこを？」

「とにかく探す！」

電話を切ると俺は地下の超低温冷凍庫へ、前に愛美から提供を受けた凍結血液と、それから自分を含めた社員や今まで提供を受けて凍結保存してある人々の血液を取りに行った。

百本あまりある凍結血液を二階の検査室に持ち込んで、自分で片っ端から遺伝子検査をしようと思った。確率は数万分の一であろうと、いても立ってもいられなかった。

まず愛美の凍結血液から白血球を取り出して、その中のDNAを二

時間かけて増幅してHLA抗原のバンド・パターンを同定する。縦じまの帯のようなバンドが同定できたのは、もう夜の十二時を過ぎていた。

それから自分の血液で試してみる。一時間後に出たバンド・パターンは、まったく一致しなかった。その後は手当たり次第、検査を繰り返した。一睡もせず、いや正確には一睡もできずに泣きそうな気分で作業を続けた。検査の合間に自分の仕事も片付けた。

「あんまり無理するなよ。差し入れを持って来た」次の日、金曜日の昼に西沢先輩が牛丼弁当を持って検査室に現れた。

「あ、ありがとうございます」俺は作業を続けながら言った。

「何をしてるんだ？」西沢さんが俺の作業を覗き込んだ。

「ある人と合致するHLA型の人を探しているんです」

「それは骨髓バンクの仕事だろ」

「わかってはいるんですが、今のところ該当者がいないので自分でも探そうとしているんです」

「…女のためか？」西沢さんが俺の目つきが必死だったのを眺めて少し呆れ顔で訊いた。

「そ、それは…」

「まあ、後悔のないよう頑張ってみろ」

西沢さんは俺の肩をポンと叩くと立ち上がってニヤリと笑いながら部屋を出て行った。それから俺は西沢さんのくれた牛丼弁当をかきこみながら黙々と検査を続けた。

夜が無情に更けたが、土曜日の明け方に奇跡が起きた。愛美と見事に合致する人を発見することができた。俺は思わず「やったあ」と暗く静まり返った検査室で一人声を上げた。

凍結血液のラベル番号から台帳を引っ張り出して該当者を調べた。絶対に漏れてはいけない個人情報なので、検体名はアナログな台帳にボールペンで記されていた。愛美と同じHLA型を持つ人の名の欄には「菱田紀子」と俺の字で書かれていた。俺は神の与えた偶然

の悪戯に大きいため息をついて動けなくなった。

骨髄移植は提供者も一日入院するくらいの体力的な負担をかける。骨髄採取は一種の手術だ。それにこの事を、どうやって紀子に言う……。

十分ほど俺は呆然としていたが、すぐに気を取り直して次の検体の検査に取りかかった。幸いにも週末で、俺は会社で一人になって月曜日の明け方まで作業に専念し全てを検査することができた。だがそれは空しい作業で、会社にあった検体の中で愛美に提供できるのは紀子だけだった。

月曜日の朝になって出勤してきた西沢課長に、俺は「親戚が危篤なんです」と有給休暇を願い出ると、すぐに俺は愛美の入院している尾張大学病院へ向かった。とにかく一刻も早く、一人の該当者がいる事実を彼女の顔を見て伝えたかった。

「病室は、愛美さんの身体が弱っているため感染予防を目的に個室です。午後からは化学療法も始まりますので、室内ではマスクをして面会はできるだけ手短に願います」と四十歳くらいで小太りの看護師に言われて俺は愛美の病室に案内された。

病室の前で俺はマスクをして、両手を消毒した。部屋に入ると愛美がベッドの上で蒼白な顔で横たわっていた。白い掛け布団が彼女の顔色の白さを一層きわ立たせていた。

「思ったより元気そうじゃないか」俺は彼女を元気づけようと虚勢を張った。

「ひろし、ごめんね。心配かけて」愛美は白い歯をのぞかせて小さく微笑んだ。

「何を言っているんだ。それより良い知らせがあるんだ」俺は手短かにHLA型が愛美と合う人を会社で見つけた。該当者は愛美と同一年の女性だと話した。

「それはどういう人？」俺の話を聞き終わると、病床に横たわる愛

美は俺を見て言った。

「…ただの知り合いだ」

「…時々、ひろしの携帯にメールを寄越す人？」

「いや、あれは…」洞察力の鋭い愛美の視線が、俺には痛かった。脇からは冷や汗が滲んだ。

「……私、いい」数秒間、天井を見上げて考えていた愛美が、ふと視線を自分の指に落とすと言った。

「いいって、どういう意味？」

「要らない、という意味」愛美がそう言って、俺と自分自身を言い聞かせるようにうなずいた。

「要らないって、どうして。骨髄移植をすれば助かるかもしれないのに」俺は愛美に思い直すよう哀願に近い気持ちで言った。

「骨髄移植にはドナーにもかなりの負担をかけるわ。そうまでして私が生きるのは神への冒とくのような気がするの」

「そんな…。前に愛美は、本来は死ぬべき人を助けようとする医学は神への冒とくじゃないと言ったじゃないか！」俺は思わず声を荒げた。

「もう何も言わないで。ごめんなさい」そう言つと愛美は白いかげ蒲団を目の高さまで上げて顔を隠した。もう帰って、と彼女の白い指が無言で言っていた。

「今日のところは帰るよ。俺は諦めないから」そう言って俺は立ち上がった。部屋を出る時に「ありがとう」と愛美が俺の背中に言った。振り返ると愛美は蒲団の中に顔を隠したまま泣いているようだった。俺は何も言えず病室を出た。

それから俺は家へ久しぶりに帰ってベッドの上に横たわった。平日の昼間にゴロゴロするのは何年ぶりだろう。

その間も俺は頭の中で何度も愛美のことを考えた。どう考えても白血病を克服するチャンスを生かすべきだ。でも……

紀子にどう言つて骨髄を提供してもらおうか？

「知り合いが白血病なので協力して欲しい」と言つと、俺と愛美がどういう知り合いなのか説明しなくてはいけない。単なる知り合いだったら何故そこまでしてあげなくてはいけないのかを整然と説明すべきだ。

親戚の女性では嘘だし、いずれバレる。下手をするとすぐに露見する。でも…、まさか恋人だなんて本当の事を紀子には言えない。いや、言いたくない。

いつの間にか俺は眠っていた。白昼夢の中で喪服のような黒い服を着た紀子が、スイングのステージに立って『やさしく歌って』を唄っていた。

「キリング・ミー・ソフトリー」彼女は唄いながら切れ長の目で、一番後ろの席に座って聴いている俺をにらんだ。「やさしく殺して」と紀子が俺に唄っているように聞こえ、俺は金縛りにあつたように動けなくなつた。なおも紀子は俺をにらみながら唄い近づいてきた。その厚めの唇には暗い紫色の口紅が塗られ、氷のように冷たい笑みを浮かべた紀子が俺に迫って唄を歌つた。

やがて歌い終わった紀子が、動けない俺の胸に飛び込んできた。

彼女は凍るような冷たい指を俺にからませて俺を抱きしめた。

しばらくして俺の胸にいた女が顔を上げると、その女性は愛美に入れ替わっていた。

「私をやさしく殺して」愛美はそう言つと俺の唇に自分の冷たい唇を押しつけてから寂しい目をして微笑むと、ヒラリと身を起して舞台脇の暗闇に去つた。俺は動けずそのまま愛美を見送つた。

翌日は仕事を必死に片付けてから五時に退社して、愛美のいる病院に一目散に駆けつけた。大学病院の脇にある小さな公園の桜は、もう大半が散つて葉桜になつていた。

たどり着いた彼女の病室には『面会謝絶』の赤い札が下がつていた。俺は驚いて通りかかった看護師に事情を訊こうとしてみると、「山崎さんですか？」とスーツ姿の青年が俺の背中に声をかけた。

「はい」

「私は井上徹、愛美の弟です」振り返ると涼しげな目元の青年が俺に会釈した。

「あ、あの、はじめまして」愛美の弟との唐突な初対面に俺は少々面食らって、お辞儀をした。

「山崎さんには大変お世話になったと、姉から聞いています」彼は名刺を俺に出したので、俺も自分の名刺を返した。井上徹の名刺には帝都大学、消化器外科学医師という肩書が書かれていた。愛美の弟は東京の外科医だったんだ…

「姉は昨日、抗がん剤大量療法を受けたのですが、今は血球が極端に減って危ない状況です」愛美とそっくりな鼻をした徹は、冷静な表情で俺に告げた。

「危ないと言いますと？」

「悪性の白血病細胞が死滅するか、自分自身の身体が死ぬかという瀬戸際の状態です。対症療法で余命数か月を生きるか、助かるために一か八か抗がん剤の大量療法を受けるかと担当医から訊かれた時、姉は迷わず後者を選びました。姉らしい潔い選択でした」

「……うまくいく確率は？」

「五分五分です。ここを乗り切って骨髄移植に持ちこめると命は助かる。そうなければいいと祈っています」

「…いつ頃その見通しが立つのでしょうか？」

「抗がん剤の半減期から考えると三日以内でしょう…。どちらにせよ、今の姉は意識もない状態なので会えませんが。東京から来た両親も宿泊先のホテルに帰りましたし、山崎さんもどうぞお引取り下さい」

「……」

「姉から貴方への手紙を預かりました」徹は白い封筒を俺に差し出した。俺は黙ってそれを受け取った。

「携帯の連絡先を教えてください。結果は必ずお知らせしますから」そう言った徹が俺の名刺を返してきたので、俺はその名刺の裏に自

分の携帯番号を書いて彼に渡し直した。

「姉はいい病院に恵まれた。この病院で助からなければ日本中どこへ行っても助かりません。そしていい人にも巡り合えた。山崎さん、ありがとうございます」と彼は俺に頭を下げた。俺も返礼した。徹の少し潤んだ眼が「もう帰ってくれ」と言っていたので病院を後にした。

病院駐車場に停めた自分の車に乗り込んで室内灯を点けると、俺は徹から手渡された封書を開けた。中から愛美の整った字で書かれた青白い便箋が一枚出てきた。

「さつきはせつかく会いに来てくれたのに、ごめんなさい。

今まで本当にありがとう。浩が私のため寝ずに骨髄提供者を探してくれたのは、貴方の顔を見たらすぐにわかった。とても嬉しかったし、貴方みたいなやさしい人と付き合えて幸せだった。

私は今から抗がん剤治療を受けます。上手くいっても髪は抜けて醜い姿になってしまうから浩の前には出られないし、薬が効かなかつたら死んでしまうのだから、これが最後の手紙です。

本当は私が死んだら、あの城内公園の桜の木の下に埋めて欲しい。毎年、狂ったように綺麗な花を咲かせて浩を見守っていたい。

でも私は浩の胸の中で病前のままの姿で生きていたい。だから勝手だけど、このままサヨナラと言わせて下さい。

時間がなくて乱筆乱文、ごめんなさい。本当にありがとう。さようなら。

大好きな浩へ」

思わず俺の目から涙があふれ出た。俺は暗闇に一人で放り出された子供のように、夜が明けるまでその場で、ただ泣いていた。

そして、夜が明けたら愛美がどんなに醜い姿になっても、どうか助かりますように、と心から祈った。髪くらい抜けたって、俺はお前を嫌いになつたりしない。本気でそう思った。

翌日は朝から必死に仕事をした。そうしていないと、気が狂ってしまう気がした。定時を過ぎても、ひたすら残業を続けた。これでもか、というくらい自虐的に仕事をしていた。

夜の十一時、見知らぬ携帯番号から俺の携帯に電話があった。愛美の弟からでは？と胸騒ぎがして取ると、案の定、徹だった。

「姉が先ほど午後十時三十八分に亡くなりました。遺体は東京に連れてゆき葬儀を致します。本当にいろいろとありがとうございます。徹は外科医らしく落ち着いて淡々と俺に言った。」

「あの…、一目だけでも彼女に会えませんか？」例え愛美が遺体であつても、もう一目だけ彼女を見たいと俺は思った。

「故人の遺志ですので御勘弁下さい。それでは」言うべき事だけ伝えると電話は切れた。

隣のデスクで残業していた西沢先輩が、心配そうな視線を俺に送った。俺はそのまま何も言わずに帰宅して自室で一晩泣きつくした。あまりにも突然の別離だった。この世に神などいない気がした。

ようやく涙も枯れた翌朝に、紀子から「ちょっとご無沙汰しちゃってごめんね。明日か明後日の夕方に会いたいけど都合はいかが？」というメールが入った。愛美を失った今、紀子の存在が地獄の中の天女に思えた。

## 終章

俺と紀子は二日後の夕方、ターミナル駅で待ち合わせた。季節は桜も散って本格的な新緑の季節になった。約束通り五時半に着いた俺は、待ち合わせる時計台の前に立つ紀子を見つけた。手を振ったが彼女は気がつかない。

小走りに近寄って彼女の肩に手をかけると紀子はビックリしたように俺を見た。

「やだ、ひろし。驚かせないでよ」

「目が悪いんだね。さて、今日は八時半の電車で帰るんだったよね？　そこで軽く食事でもしよう」少し早く帰りたいと書いてあった紀子のメール内容を確認するように俺は言って、駅前ビルの二階にあるイタリアン・レストランを指差した。彼女はニツコリと頷いて俺の後に従った。

レストランに入ると中は少し混んでいたが、俺たちは窓際の席に座れた。ここは足もとまでの大きなガラス窓に覆われて温室のような少し風変わりな設計で、俺は気に入っていた。眼下には忙しく駅を行き交う人たちが眺められ、空には気持ちの良い青空がまだ残っていた。

俺たちは前菜とパスタとサラダ、そして飲み物のついた日替わりコースを注文した。

「あ、ビールでも飲もうか」と俺が言っていると、紀子は「うん」と微笑んだ。やがて来た生ビールで紀子と乾杯した。

「久しぶりだね。こうやって紀子と食事をするの」

「本当ね。ご無沙汰しちゃってごめんね」紀子はニツコリ微笑んだ。彼女の笑顔は澄んだ青空のように爽やかだった。愛美のいない今、紀子の笑顔にはとても癒された。

生ハムとテリーヌを中心とした前菜が出てくると、それを食べながら

ら紀子は俺の顔を眺めながら

「ひろし、少し痩せたんじゃない？」と言った。

「ああ、健診で少し中性脂肪が高いと言われたので食事を少し減らしてるんだ」本当は愛美の死で食事が喉を通らなかつたのだが、とっさに取りつくろった。

「へー、スタイルが良いのに脂肪が高いの？」

「ああ、母親もそうだから遺伝かな」

これは事実だ。紀子に会えて、久しぶりに食事が美味しいと感じた。空はいつしか夕焼けから藍色になり、店内の座席も半分くらいは埋まつてきた。ターミナル駅に近いせいか、あるテーブルは仕事帰り風の若いカップル、その隣は若い女性四人が旅行帰りなのか、大きなバツクを床に置いて楽しそうに喋りながら食事をしていた。

「実は私、来月からアメリカに行く事になったの」紀子がパスタに口をつけると言った。

「え…？ 突然だね。どうして？」俺は予期せぬ彼女の言葉に驚いた。

「ロサンジェルズ在住のベナードというミュージシャンから、一緒に仕事をしないかという打診が来たの。それで最近バタバタしていたの」

「それは凄いね」

「彼がこの冬に来日して私の唄を聴いたら、自分の作った曲に私のイメージがピッタリ合うと思ったんだって。それで、彼の作った未発表曲の中から私の好きな唄を選んでCDにしようというオファーがあったの。若干の不安はあるけど一度しかない人生だから賭けてみようと思う」

俺は少しの間、言いようのない寂しさを感じて絶句した。俺の本音と勝手が言えるなら、今この時期に紀子に去られたくない…

でもこれは彼女にとって千載一遇のチャンスなのだろう。門出を笑顔で送り出してやりたい。いや、そうしてやらねば男が廃る、大

人の男ではない、と頭を切り替えた。

「そうか。それは、おめでとう」数秒後、俺は気を取り直して紀子に言った。

「ひろしのお陰よ。人間は社会で生きる以上、人に合わせることは必要だけど合わせてばかりでは自分が自分でなくなる。それよりも自分の思うように悔いのない人生を精一杯生きるべきだと私に思わせてくれた」

「ああ、俺はそう生きたいと思う」

「でも実際のところ、すぐに渡米しても経済的にやっていけない。だからあと半年ほどは日本で働いてお金を貯めようと思っていたのだからひろしには何も言わなかった」

「そうか…」

「一昨日になって、ダメ元で応募したロサンゼルス市内の日系企業で社員として採用してもらえる事が思いがけず決まったの。それで、来月から急遽あちらへ行く事にした」

「それは重ね重ねおめでとう。…もう少し飲む？」

二人のジョッキは空になっていたの、俺は紀子に訊いた。

「そうね、赤ワインをグラスでもらいましょうか？」

「いいね、そうしよう」

店員が勧めた赤ワインをグラスでもらうと、空はすっかり暗くなり都会の夜景が輝き始めていた。俺たちが選んだパスタ、カルボナーラがサラダと共に出された。卵とベーコンがホワイト・ソースにからめられていて美味しそうだった。

紀子はそれから自分の身の上話を俺にした。子宮癌を患った母親は四十歳で亡くなり、尾張芸術大学を出た後、父親も五十三歳にして膵臓癌で亡くなった。

一人になっっているいろんな店を転々と渡り歩いて歌い続け苦労して暮らしてきた。数年して、ようやく歌手として自立できそうになった矢先、世界的な不況が襲ってきて所属会社が倒産して再び店を回

る歌手になった。

自分の寿命が両親のように短いのではと不安に怯えながら、でも夢は諦めず自分の歌い方を磨いてコツコツ実績を積み上げてきた。

彼女の話聞いてるうち、彼女がいろいろいな障壁を乗り越えて一歩一歩前進し続けてきたんだ、と尊敬に似た感情を覚えた。その紀子を選んだ選択なら、きっと彼女は幸せになれる。彼女の話聞いていくうちにそんな気持ちが強くなった俺は、紀子が話し終わると彼女のアメリカ行きを心から祝ってやれた。

「もう時間だね」デザートの後、エスプレッソを飲み終わると俺は腕時計を見て言った。

「そうね。じゃあ、私そろそろ行くわ」

「駅まで送って行くよ。今からだとJRの方が早い」

「え？ そうなんだ。わたし全然知らなかった。まだまだ知らない事が多いわ」紀子はフフッと小さく笑った。

「いろいろな事を知らないうちに向こうへ行ってしまうんだね」

「本当にそうね。でもまだ十日もあるわ」

「もう手遅れだよ。少なくとも紀子の方向音痴を治すには時間がなさすぎる」

「ハハハ、そうね」

レストランを出て歩くと、夜のターミナル駅にはまだ人が多かった。

「じゃあ、私はここで」

「ああ、気をつけて」

切符を買って改札を通る紀子を見送った。彼女は改札の向こうから俺を振り返ってニッコリと手を振ると、いつものように振り向かず前だけを見て歩いていった。紀子が階段を降りてホームへ消えていく前に、俺は踵を帰して家路についた。最後の最後まで彼女を見届ける自分の姿は、何処か未練がましいと思えたからだ。俺は紀子を振り切ろうとして足早に地下鉄の駅へ向かった。

その晩、紀子からメールが来た。

「いろいろお世話になって、ありがとう。今日は言いそびれたけど浩も頑張ってるね。頑張っている浩の姿は格好いいよ。大好き」

それから十日はあつという間に過ぎた。ある程度、予想していた事だが紀子とはもう会う時間はなかった。ビザの申請や海外への引越しの用意など海外移住を始める事は、そんなに簡単な事業ではないからだ。

だが、俺はその状況を不思議と静かに受け入れる事ができた。あま里にも衝撃的な事が短い期間に重なって、悟りが開けたように思えた。俺は大人の男になれたのだろうか？

そうこうしている間に彼女の旅立ちの日は刻一刻と迫り、瞬間に紀子が発つ前夜になった。その夜、俺はどうしても抜けられない接待のため夜の街に駆り出されていた。十一時過ぎに、ようやく店から外に出ると彼女から俺の携帯にメールが送られてきていた。飲んでいた店が地下にあつたのでメールを受信したのがかなり遅れてしまったようだった。

「お仕事お疲れ様。今この携帯を解約するためにお店に来ています。だから、この携帯は今から使えなくなります。でもパソコンのアドレスは当分そのままだから向こうでも使えます。たまにはメール下さい。」

今まで本当にお世話になって、ありがとう。では」

ちよつと海外旅行に行つてきます、というような感じの軽い文章だった。でも実際には…

先日のイタリアン・レストランでのデートが紀子と会う最後かもという予感はしていた。あの日の彼女の笑顔が、とても爽やかに輝いていて何処か彼女が達観していたように思えたからだ。あの時のテラス席で夕日を浴びた彼女の笑顔は、とてもすがしく美しいかった。

紀子からのメールを読んだ俺は、とにかく明日、国際空港へ行こ

うと思った。何処の空港からどの便で発つのかはわからない。今からではもう紀子との連絡は取れない。でも、とにかく行ってみよう。一目だけでも紀子の姿を見られたら、それだけでいい。もう一度自分の目蓋の奥に彼女を焼きつけておきたかった。

帰宅して風呂に入ってからパソコンを立ち上げた。そしてインターネットでロス行き便の時刻表を調べた。可能性のある便は十二時十五分から十八時まで、サンフランシスコ経由を含めると三便あった。

ハワイを経由する気だったら夜二十時の便がある。だけどこれから海外移住に向かおうとする奴が、いきなりハワイで遊んで行くはずはない。十八時までの便に賭けようと思った。

翌朝、出社するや否や俺は西沢先輩に「今日は外を回ってきます。二十時には帰社します。何かあったら携帯に連絡して下さい」と言った。

「……うん、気をつけて」西沢さんは何かを察したのか、したり顔でうなずいた。俺は脱鬼のごとく会社を出て車で国際空港へ向かった。車を飛ばして街中の喧騒を走り抜けて空港へ着くと午前十時だった。駐車場に車を入れると、俺は空港ビルに駆け込んだ。そして国際線の出発便カウンターをできるだけ広く見渡せるソファを見つけると、そこに座って次々とやって来る乗客に目を配った。紀子の姿はなかった。

十二時十五分発のロス直行便と十三時発のサンフランシスコを経由してロスへ向かう便の乗客が全て出国ゲートに消えても紀子を見つけることはできなかった。次は十八時発の直行便、それが今日の最終便だ。

俺は少し休憩しようとして立ち上がってブラブラと空港ビルの中のスパーへ立ち寄った。しばらく店内を歩き回った後、ジャム・パンとペットボトルの紅茶を買った。

店から外に出て、先ほどのソファに腰を下ろした。食欲は全くな

かった。周囲は楽しそうにした観光客が行き交っていた。取りあえず紅茶のペットボトルの蓋を開けて一口飲んだ。ずっと気が張り詰めていたせいなのか、空調のせいなのか、乾いていた喉が潤った。

そこへ会社にいる西沢さんから携帯に電話が入った。

「M社の加藤君がお前に会いたいと、さっき来たんだけど明日にしてくれと言っておいた。明日の朝九時前に来るそうだけど、それだよかったな」

「まさか不良品ですかね？」

「いや、例の遺伝子組み換え大豆に資金提供したい。完成したら販売をウチの社で一手にお願いたいけど、そういう事が可能かどうかお話を上司と一緒に訊きたいとのことだった」

「それは願ってもない話ですね」

「最近のお前は凄いやつだよ、八八。じゃあ」

「あ、西沢さん…、明日の夜、一杯やりませんか？」

「ああ、いいよ……。何か積もる話もあるようだから聞いてやるよ」

「そんな…、先輩と祝杯を上げたいだけです」

「八八。じゃあ、また明日」西沢さんが意味深な笑い声を残して電話を切った。

俺は西沢さんに何もかも見透かされているような気がして額から少し汗が出た。でも今の電話で彼に少し元気をもらえた気もした。俺は再びベンチに腰を下ろすと、出発カウンターに来る人々に再び注意深く目をやった。

結局、十八時のロサンジェルズ行き最終便の乗客がすべて出国ゲートに消えるまで、俺はまんじりともせず見張っていたが紀子の姿を見つけることは出来なかった。

やはりあの駅で会ったのが紀子との最後のデートだったか……。少し暗くなり始めた空に最終便が飛び立っていくのをデッキから見送ると、俺は急に空腹を覚えた。そう言えば朝からほとんど飲まず食わずだったのを思い出した。手には昼間に買ったスーパーのビニ

ール袋があった。

そうだ、これを車の中で食べよう。

取りあえず駐車場に戻ると車に乗り込み久しぶりにカーステレオをつけた。このところは時間がなくて音楽という物を全く聴いてなかったので本当に久しぶりだった。

CDのスイッチを入れると菱田紀子の『やさしく歌って』が流れた。曲を聴きながら昼に買ったジャム・パンを食べた。

「キリング・ミー・ソフトリー」と唄う紀子の声が、「私をやさしく口説いて」と切なく訴えるように聴こえた。「アメリカには行かず、俺の近くにいて欲しい」と紀子を求めた方がよかったのか？

いや、本当はそうしたかった。

しばらく聴いていると、今度は愛美が「私をやさしく殺して」と言っているように聴こえた。

本当に君は死んでしまった…

それにしても、二人とも遠くに行ってしまったな…

沖から押し寄せる波のように二人の女性がやってきて、引く波のように二人とも去って行った。

人生や世の中って海のように動いているのかもな…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9343t/>

---

やさしく歌って

2011年6月18日13時10分発行